

ワン・ワールド・フェスティバル トークセッション「国際協力のはじめ方」

開催報告

日時 2015年2月7日(土) 13:00~14:00

場所 関テレ扇町スクエア1階(アトリウムなんでもアリーナ)

パネリスト

道端 カレン氏(モデル)

高橋 基樹氏(国際開発学会 会長 兼 神戸大学大学院国際協力研究科 教授)

井川 定一氏(認定NPO法人 アイキャン事務局長

旧:アジア日本相互交流センター・ICAN)

西野 恭子氏(独立行政法人 国際協力機構広報室長)

モデレーター

荒木 要(外務省国際協力局政策課企画官)



写真提供:ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会事務局

(荒木) 皆さん、こんにちは。本日のトークセッションの司会を務めます、外務省国際協力局政策課の荒木です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。本日は外務省の主催で、「国際協力のはじめ方」というタイトルで、多彩なゲストの皆さまをお迎えしました。国際協力とは何なのか、そして我々一人一人に何ができるのかということについて、皆さんと一緒に楽しく考えていくことができればと思います。

早速ですが、ゲストの方々に自己紹介していただきたいと思います。まずは皆さんご存じだと思いますが、道端カレンさんから一言お願いします。

◆自己紹介

(道端) はじめまして、道端です。皆さん、よろしくお願ひいたします。私は小学生の息子が2人いるのですが、子どもを持ったことで国際協力や社会貢献についてとても興味を持ちました。今、ユニセフの活動をさせていただいているのですが、今日は皆さまと一緒に先生方のお話を聞いて、国際協力のいろいろなことを学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

(荒木) ありがとうございます。続いては、井川さんです。NGOの活動について紹介していただくため、本日わざわざフィリピンからお越しいただきました。井川さん、お願いします。

(井川) ご紹介にあずかりましたICANの井川と申します。フィリピンからちょうど着いたところで、また明日フィリピンに戻ります。生まれも育ちも関西で、今日は学生の方もいらっしゃいますが、私もちょうど学生のころにこういう活動をしたと思っています。その後、10年たって今何をしているかというお話をさせていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

(荒木) ありがとうございます。続いて、アカデミックな世界から来ていただいた国際開発学会会長で神戸大学大学院国際協力研究科の高橋教授です。よろしくお願ひいたします。

(高橋) 高橋です。神戸大学でアフリカ経済論、開発援助のことを教えています。私が属している大学院は、国際協力に携わる人々を育てることを一つの目的にしています。今日は若い方がたくさんいらっしゃるので、ぜひうちの大学院を受験していただきたいと思っています。それから、国際開発学会は、国際開発や援助、貧困のことを勉強する研究者や専門家が集まっている団体なのですが、その会長をしています。興味がおありの方はどなたでも入っていただけるので、今日聞いて面白いと思っていただけたら、ぜひ国際開発学会のメンバーになっていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

(荒木) ありがとうございます。最後にODAの実施の最前線で活躍されているJICAから、西野広報室長、お願ひいたします。

(西野) 皆さんこんにちは。私は国際協力機構JICAの広報室長をしている西野と申します。広報室では、皆さんにJICAが行う国際協力や途上国の現状を広く知っていただくためのいろいろな活動をしています。長らくJICAで働いているので、いろいろな部署でいろいろな仕事を経験しましたが、最近では保健医療分野の協力や、途上国の女性に対する支援を推進する部署にい

ました。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

(荒木) ありがとうございます。このイベントは国際協力についてのイベントですが、そもそも国際協力とは何なのか、また開発途上国というのは実際はどんな感じなのかについて考えてみたいと思っています。私自身は一昨年に今のポストに就くまでは、在ブラジル大使館で勤務しており、ブラジルでもODAを担当していました。皆さん、これまでどんな途上国に行かれたことがあるのか、一言ずつ教えていただければと思います。

(道端) 私はタイやインドネシアに行きました。

(荒木) それは観光かビジネスですか。

(道端) 観光で行きました。

(荒木) タイはどんな感じでしたか。

(道端) 好きで結構行っているのですが、日本と全然違うという印象は毎回受けています。

(井川) 私は学生のころ、バックパッカーで20カ国ほど旅をしてきました。一人でリュックを背負ってです。でも、この10年はもうフィリピンですね。フィリピンの大学院を卒業して、そのころからずっとフィリピンです。

(高橋) 最近よく行く国はケニアです。去年は2回行きました。一度は、学生諸君と一緒に調査で行きました。もう一度は、国民の代表として日本政府が行っている事業の評価をしに行きました。

(荒木) 評価というのは、ODAを実施した後に、その事業がどのような結果になっているかをきちんと確認するフォローアップの仕事で、高橋先生に第三者の視点で確認していただいたということです。

(西野) 私は広報室の前の部署のとき、途上国の女性支援で、ケニア、ナイジェリア、ニカラグアに行きました。ケニアでは農業における女性の役割が非常に大きいのですが、その役割がきちんと認められていないということで、女性と男性が対等なパートナーとして農業に携われるようにするための支援をしていました。ナイジェリアでは女性をサポートするセンターが全国にあるものの、十分機能していないので、センターで職業訓練や識字教育などがきちんと行われるようにするための協力をしています。ニカラグアは、コミュニティと行政が一緒になって、そ

の地域のいろいろな課題を解決するプロジェクトのために出張しました。

(荒木) 会場の皆さんはいかがでしょう。途上国に行かれたことがある方は手を挙げていただけますか。やはり関心のある方が来てくださっているのか、ほとんどの方が行かれていますね。何か変わったところに行ったことがある方がいらっしゃいますか。アフリカに行かれた方はいますか。結構いらっしゃいますね。アジアに行かれた方はどうでしょう。やはりアジアの方が多いですね。私はブラジルにいたのですが、中南米はいかがですか。若干少なめです。日本はいろいろなところで国際協力をやっています。国際協力は地域や国によってニーズが違うと思うのですが、途上国には一般的に見てどんなニーズや、われわれが援助・協力しなければいけないところがあるのか、アカデミックな観点から高橋先生に分かりやすく説明していただきたいと思います。よろしく願いいたします。

◆途上国のニーズ

(高橋) 私がよく行く国はケニアなので、そのお話をしたいと思います。驚くようにどんどん高層ビルが建っているというのが、今のアフリカの状況です。日本大使館の周りには、とても近代的なビルがたくさんあります。デフォルメされたような芸術的なビルも見えたりします。スーパーマーケットに行くと、日本で売っているものと同じぐらいの豊富な品ぞろえが見られます。貧困の一つの要素はこの逆のお金がない状況のことで、われわれは貧困を世界中からできるだけ少なくしたいと思って仕事をしたり勉強をしたりしています。ただ、貧困というのは単にお金やものがないことを意味するわけではありません。社会のサービスが非常に乏しくて、教育が遅れていて、不衛生な環境に囲まれているということも貧困です。

ケニア最大、東アフリカ最大のスラムであるキベラは、何人住んでいるかよく分からないのですが、一説には100万人といわれたり、20万人といわれたりします。普通に人々が住んでいる横に適当にゴミをどんどん捨てていく場所があり、そのゴミが、大雨が降ると流れて谷底に集まってしまう。場所によって下水がきちんと掘られていないので、排水が悪くて道はグチャグチャです。普通の靴で行くと歩けなくなってしまう。

ただ、人々がその貧困の中で何もせずにその状況を受け入れて暮らしているかというところではなくて、皆さん力を合わせて努力されています。学校をつくったり、診療所をつくったり、水道や下水を自分たちの手で整備したりしています。キベラは約100年の歴史があるのですが、皆で力を合わせて、政府の支援を受けずに、長い時間をかけて排水路を掘っています。そして、自分たちの周りから汚い水を流してしまおうという努力をしているのです。

さて、貧困の横には争いがあります。ケニアのある地域には、紛争で燃やされてしまった家もあります。紛争の裏には貧困や格差があります。紛争が起こると、貧しい人たち、脆弱な人たちは

もっと貧困になるという悪循環が生じます。けれども、忘れてはいけないのは、アラブやアフリカの画像を見ると皆さんすぐに「かわいそうで気の毒だ」と話すのですが、人々は自分たちで和解して新しい社会をつくろうと努力しているということです。共生するための人々自身の努力が現地にあることを、われわれは忘れてはいけないと思います。

紛争で焼け出された人たちが、何万人も掘っ立て小屋に避難しています。うちの学生と一緒に、犠牲者の墓場に行きました。教会が燃やされて30人ぐらい焼死してしまったのですが、全員が女性か子どもです。半分以上は年端もいかない子どもでした。学生は驚いて言葉を失っていました。難を逃れた方からお話も聞きました。

さて、紛争の陰には貧困があり、貧困は非常に深刻なのですが、国際社会はそれを何とか減らそうということで、2015年までに達成すべき八つの目標（ミレニアム開発目標）をつくりました。主なものをご紹介しますと、貧しい人たちの比率を半分にする、学校に行けない子どもたちをみんな行けるようにする、幼児が亡くなってしまう比率を減らすなどです。貧しい発展途上国では、子どもが5歳までに亡くなる比率が非常に高いです。一番高いシエラレオネという国では、6人の赤ちゃんが生まれたとして、5人しか5歳になれず、1人は死んでしまうという状況があります。

2015年までに貧困の比率を半分にしようと考えたのですが、2015年までには達成できないだろうと推測されている国が多いのです。2015年になってしまいましたが、まだまだ課題は残っていて、我々の貧困削減のための努力が足りないということです。いろいろなことを積み残したまま、最終年の2015年を迎えてしまったのですが、今後も我々は果たせなかったミレニアム開発目標の貧困削減を達成するようにはしていかなければいけません。ただ、今まで貧困に集中するあまり、環境への配慮や持続可能性については、十分に問題にしてこなかったのです。貧困をなくすためには、雇用、人々が自分でお金を稼いで物を作るということができなければいけません。また、日本でも格差が大問題になっていますが、世界中で格差が問題になっており、格差をなくしていかなければいけません。そのために、より一層国際社会が、あるいは国内の人々が協力するという枠組みをつくっていかなければいけません。そこで今、ポストミレニアム開発目標を改めてつくる、もう一回仕切り直ししようということを議論しています。そのために外務省の職員の方も大変苦労なさっているという状況があります。

（荒木） どうもありがとうございました。去年はODAを始めて60周年という記念の年だったのですが、今年はこのポストミレニアム開発目標の節目の年です。カレンさん、高橋先生の説明を聞いて、何かコメントなどありますか。

（道端） 貧困の問題は、ただ食べるものがなくて貧しいだけではなくて、その陰にある紛争や

雇用の話とつながっているということを学ばせていただきました。

◆NGOの活動

(荒木) 現地のニーズに応えるためにいろいろな国際協力活動が行われているのですが、井川さん、NGOではどんな活動が行われているのか、ご自身の活動についてご紹介いただければと思います。

(井川) 私たちICANは1994年、20年少し前にできた団体で、日本のNGOです。フィリピンで主に活動しています。そもそもNGOとは何だろうと思われる方もいらっしゃると思うのですが、政府でもなく、企業でもなく、市民として社会の課題に対して取り組む団体で、特に海外で活動する団体を私たちはNGOと呼んでいます。NGOには、無給のボランティア中心にやっている団体から、給料をもらって働いている職員がいて専門的にやっているところまで、非常に幅があるのですが、私たちの団体は給料をもらっている職員が70名、日本人はそのうち20名、フィリピン人が50名となっています。

いろいろなことをしているのですが、主なものを三つだけ説明します。先ほど高橋先生のお話にあったことと重複するのですが、一つ目は都市化に伴う弊害ということで、特にマニラの路上の子どもたち、ゴミ処分場の子どもたちに対する事業を行っています。マニラに行かれた方は見られたかもしれませんが、路上に子どもたちがたくさんいて、増えているという状態があります。マニラ首都圏の中でもマニラ市では、線路沿いの路上で子どもたちが多く生活しています。

(荒木) この線路はまだ使っているのですか。

(井川) はい、使っています。電車が来ると音が鳴って、みんな「電車が来た！」と言って逃げるのですが、中にはシンナーを吸って脳が溶けてしまっている子どももいて、半年ほど前には私たちが事業をしている地区で子どもがひかれて亡くなったケースもありました。こういった状況に対して、まず路上の子どもという点では、一つ目は、地域の行政強化のために研修を行っています。やはり行政にしっかりしてもらう必要があるということです。二つ目は、路上の子どもといってもみんな助けを待っている存在ではなく、自分たちで解決しようという力を持っている子どももいるので、そういう子どもたちに関しては、グループをつくって勉強会をしたり読み書きを教えたり、あとはマニラでカフェとパン屋さんを一軒開こうという取り組みをしたりしています。三つ目は、私たちの事業地でも数カ月に1回のペースで子どもが亡くなっているのに、命の危険がある子どもたちを早急に保護しています。

また、マニラには路上の子どもの課題の他に、ごみ処分場周辺で暮らす人たちもいて、健康被

害や低賃金の問題があります。そこでは住民がグループをつくって薬局を運営して、その運営費で診療所を運営していくというシステムをつくるとともに、技術訓練を行いフェアトレードの活動を行っています。

また、フィリピン南部のミンダナオ島の中部は、紛争地になっています。この写真は、私が半年前にある学校に視察に行ったときのものです。驚いたのですが、子どもたちが壁に、子どもが銃で撃たれている場面や戦闘機の絵を落書きしているのです。こういうものが日常的にあるのです。そういうところでの私たちの取り組みの一つに、「平和な学校」というものがあります。ハードとして校舎を建設すると同時に、ソフトとして先生たちに対して平和教育のトレーニングをしています。そうすることで先生たちが紛争地域での授業の中に平和教育を取り込めて、地域で平和教育が推進されるようになっています。

地域の平和のために争いはやめて仲良くやっていきましょうという式典なども行っています。そこには政府側の方もいらっしやったり、政府側でない方もいらっしやったりします。政府側でない方の中には幾つかの争っているグループの方もいるのですが、式典には一緒に出てください。

また、ミンダナオ島でも、紛争地域と呼ばれるところではない、3~5時間山を歩いて川を越えて行くような場所には、昔ながらの伝統的な生活を送っている先住民の方々が住んでいます。そういうところで学校を開いて教育を普及したり、トイレを建設したり、保健の研修をしたりと、その地域の文化に合った形で活動を行っています。

フィリピンというと、1年少し前に大きな災害がありましたが、実はそれから1年後の昨年12月にもまた台風が来ています。毎年のように台風が来て、弱い地域になっているのです。こういうところでは食料の提供を行っています。ちなみに1年前に大きな台風が襲ったレイテ島では、食料を1万世帯に提供しました。家5000世帯の建設、学校130教室の修復・建設がもうすぐ終わろうとしています。また、学用品の提供などの活動を行っています。

これらの活動は、多くの方々からの寄付や政府からの補助金などを合わせて活動を行っています。

(荒木) ありがとうございます。すごく幅広い活動をされていますね。政府開発援助(ODA)は政府がやることですが、ODAだけでは現地のニーズに全く対応できないところがあって、われわれ日本政府はNGOの方々とも協力しながら事業を行っています。井川さん、NGOと外務省、JICAはどのような連携を取っているか、ご説明いただけますか。

(井川)一例を申し上げます。私たちは20年以上ミンダナオ島で活動しているので、例えばミンダナオ紛争地の平和構築について、ノウハウがあります。ただ、資金が足りません。外務省に資金を提供していただいて、私たちが活動するという形で協力し、力を合わせて地域の平和に貢献しています。他にも災害時にはJICAの緊急援助物資を私たちが提供させていただいたり、最近ではNGOと政府の2者だけではなくNGOとJICAと企業の3者の連携も進んでいます。

(荒木) 今回のイベントでは大変多くの日本のNGOがブースを出していますが、日本のNGOを世界の他国のNGOと比べるとどんな違いがあるのか教えていただければと思います。

(井川) いろいろ違うところはあります。まず、欧米の方が歴史が長いので、経験やノウハウがたくさんあると思います。ただ、現時点で一番違うと思うのは、やはり資金力です。欧米のNGOは、驚かれるかもしれませんが、大きいところだと年間600億円規模で活動しているところがあります。日本で一番大きいところは、どこまでNGOとするかにもよりますが、その10分の1ぐらいで、その100分の1である6億円で活動しているNGOも数えられる程度だと思います。資金の違いの背景にある、寄付して下さる方やこういう活動をしようと思う方の数自体が、欧米と日本では圧倒的に違うのだと感じています。

(荒木) 今回、このイベントで多くのNGOが募金や物品の販売で資金集めをされていますので、ぜひ回っていただいて、関心があればそういうところでご協力していただければと思います。

◆日本の援助の特色

(荒木) 高橋先生、国際協力については、NGOの他にも政府レベルでも欧米と日本の間ではいろいろな違いがあると思うのですが、どのような違いがあると思っていच्छいますか。

(高橋) 特に触れるべきなのは政府開発援助(ODA)かもしれませんが、今のお話の関係で言うと、特に北ヨーロッパ、西ヨーロッパ、イギリスやスウェーデンといった国を考えると、まず援助に非常に強い市民社会の支持があります。一つ驚いたことに、昔、サッチャー政権は援助を否定的に捉えていて、援助を減らそうとしたときに、ロンドンのトラファルガー広場に数千人が集まって、「イギリスは昔、国民総所得の0.7%を出すと約束した。それに達していないのになぜ減らすのだ」とデモが行われたのです。日本でそういうデモがあったという話を聞かれたことがありますか。日本では、ODAもずっと減ってきているのです。私の教育が悪いのか、外務省・JICAの広報の仕方が悪いのか分かりませんが、援助の予算が減っていることに対して立ち上がって抗議する国民はいません。それが一つ大事な違いだと思います。

また、日本は経済的に発展してきたアジアの国々を支援してきたので、経済的なセクター、例えば道路や送電線や港の建設といった支援が多くあります。逆にヨーロッパの国は、近くのアプリ

力を支援してきたので、教育や保健などの問題に対応するための援助をたくさんしています。ただ、日本のJICAや外務省の名誉のために言うと、日本はアフリカではそういうことに一生懸命を入れているのです。ただ、アフリカでは、人々が自分で食べていかなければいけないということで、農業などに力を入れようとしていることが一つ日本の特色かもしれません。

一方で、アフリカでは国々がとても若いので仕組みが発達していません。そういうところには、先生のように上から目線で傲慢だと批判されても一所懸命よい国をつくろうというところを支援するのがヨーロッパの国々ですが、日本は仕組みづくりの対応が少し弱いかもしれません。そういう違いを指摘できると思います。

(荒木) ありがとうございます。なかなか厳しいご意見も頂きました。政府でやっている側として、日本の援助というのは、単にお金や食料だけをあげても、消費するだけでは次につながらない。自分自身で立ち上がる自助努力を活かしていきたいというのが特徴です。単に貧困の対症療法をするのではなく、貧困から自分で立ち上がる能力を付けてもらいたい。魚をあげるだけではなくて、魚の釣り方を伝える、たとえば釣りざおという道具をあげることによって魚を釣れるようにする。そういうことが日本の援助の特徴だと、われわれは自負してやっています。

一つの例としては、皆さんサーモンを食べると思います。今、多くのサーモンはチリから輸入されていますが、あれはJICAの技術協力も貢献しています。魚の釣り方だけではなく、魚の養殖の仕方もわれわれは伝えてきて、それが今、日本の食卓を潤わせているということをご存じでしたか。

(道端) 知りませんでした。でも、ユニセフのお話をさせていただくと、ユニセフは井戸の作り方を現地で教えてあげて、井戸が壊れたときに、現地の人自分たちの手で直すことができるようにしています。それまでは、新鮮な水をくみに行くのが女の子の仕事で、重いつぼを頭に掛けて片道何キロを往復していて、学校に行く時間もなかったそうです。

(荒木) ユニセフについては、ぜひまた後ほど伺いたいと思います。今、NGOの関係で井川さんからJICAとの連携の話にも若干触れていただきましたが、ではJICAはどんなことをされているのか。私は外務省でODAの政策や、先生から厳しい指摘があった予算関係の仕事をしています。JICAは日本のODAを実施している機関です。具体的にどんなことをおこなっているのか、西野広報室長からご説明いただきたいと思います。よろしくお願いします。

◆JICAについて

(西野) それでは、JICAについてご説明します。JICAは日本のODAの実施機関で、開発協力や国際協力を一元的に実施しています。本部は東京にあり、国内15カ所、海外91カ所に事務所を持っています。なぜ国内に15カ所もあるのかと思われる方もいらっしゃるかと思いますが、国内の拠点は、日本に行政制度や技術を学びに来る途上国の研修員を受け入れる拠点としての役割や、日本全国の自治体や企業のノウハウや技術を途上国へ橋渡しをするような役割をしています。

JICAのビジョンは、全ての人が恩恵を受けるダイナミックな開発ということで、先ほど高橋先生からポストMDGsの話もありましたが、やはり「全ての人々」がキーワードだと思っています。全ての人が恩恵を受けるダイナミックな開発を進めていくということをしています。

JICAは、大きく分けて三つの種類の協力をしています。一つ目が技術協力です。途上国の人材育成、あるいは日本の専門家を派遣して制度づくりを行ったりする、人を通じた協力と言っていると思います。あとの二つは資金的な協力です。一つが無償資金協力で、これは学校や病院といった基本的な設備を整備するための資金を無償で提供するものです。もう一つは有償資金協力で、これは橋や空港といった大きなインフラの整備に緩やかな条件、すなわち安い利息でお金を貸すものです。この三つが大きな柱となっていますが、それ以外にも、先ほどフィリピンの台風の話も出ましたが、そういったときに迅速に国際緊急援助隊を派遣したり、被災地へ毛布やテント、医薬品を供与したりしています。

また、市民参加協力ということで、一番有名なのは青年海外協力隊などのボランティア事業かと思うのですが、それ以外にも先ほどICANの井川さんからお話があったJICAとNGOで一緒になって行う事業をしています。あるいは、自治体や大学の皆さんが国際協力活動をする際に、いろいろな形でサポートしています。

日本の協力の特徴は、一つは日本自身の経験を踏まえた協力であるということと言えます。日本も第2次世界大戦の後に自国の復興のために努力してきたのですが、そのときに国際社会から非常に大きな支援を得ています。日本自身が被援助国であったという歴史があって、その経験を踏まえて、途上国側、援助を受ける側の自主性、自助努力を尊重した形の協力を進めていくということが大きいと思います。また、人材育成や制度づくりも、先ほど高橋先生からアフリカあたりでもっとそういうことをやるべきだというお話もありましたが、おっしゃっており、日本の協力は伝統的にそういう国の仕組みをつくることにも力を入れています。また、インフラ支援は、日本も世界銀行の支援で新幹線や東名高速道路を造っていますが、インフラは国の基盤になるものですから、そこに対する支援も充実させています。

もう一つ付け加えたいのは、丁寧な協力を行っていることです。日本人の特性として、一般的にきめ細かい、勤勉、時間を守るということが言われますが、日本人が途上国に行って活動する、あるいは途上国の方が日本に来て日本人を見たときに、日本人の行動、特性は非常に高く評価されていて、大きなインパクトを与えているのです。ですから、そういったところも、直接的に支援している内容と同じぐらい大事なものだ、協力をして感じています。

少し話が変わりますが、今年でJICAのボランティア事業が50周年を迎えるということで、現在ロゴも作って皆さんに知っていただくよう努力しているところです。皆さん、50年前に青年海外協力隊を初めて派遣した国がどこか、ご存じの方はいらっしゃいますか。実はラオスなのです。50年前というとまだ1ドル＝360円の固定レートで、海外渡航も一般的でなかった時代です。そうした時代にラオスに5人の青年海外協力隊が派遣されたのが初めです。これまでに累計で世界96カ国に4万7000人のボランティアが派遣されて、世界中で活躍しています。

(荒木) JICAの活動について詳しく説明していただき、ありがとうございました。JICAではいま説明のあった活動やNGOとの連携以外にも、企業との連携を積極的に行われていると思います。昔は発展途上国に流れていくお金はODAがほとんどだったのですが、グローバル化が盛んになって、最近では、たとえば、私がいたブラジルのような新興国にも世界中の企業が投資するようになってきていて、今や途上国へのお金の流れがODAの2.5倍にも達しているという状況です。その中で国際協力の世界でも企業との連携が非常に重要になっていると思うのですが、JICAでは具体的にどんな連携をされているのか、ご紹介いただければと思います。

(西野) 国際協力のパートナーとして、民間企業が果たす役割が非常に大きくなっています。民間企業の持っている資金力、あるいは技術、ノウハウは、途上国の課題解決にも非常に有用です。それと同時に、企業にとっても大きなビジネスチャンスということで、JICAは途上国と企業の双方にメリットがある、Win-Winの事業を目指して、私たちがこれまで蓄積した途上国の情報や国内外のネットワークを活用して、民間企業をサポートする仕事を積極的に進めています。

中でも、最近ではBOP (Base of the Pyramid) ビジネス、約40億人いるといわれるピラミッドの底辺の貧困層の方々を対象とするビジネスを積極的に進めています。BOPビジネスは、社会課題解決型の新しいビジネスモデルといわれています。JICAとしてはBOPビジネスを行おうとする企業に対して、そのビジネスモデルを開発するための調査を行ったりすることを支援しています。

具体的な例をご紹介します。一つ目は、住友化学が行っているマラリア対策の事業です。昨年、日本でもデング熱が発生して話題になりましたが、マラリアはデング熱と同じように蚊が媒介する病気です。今でも多くの途上国では、特に子どもたちがマラリアで命を落としています。マラリアはデング熱同様、今のところワクチンがなく、基本的に蚊に刺されないことが一番大事

な対策になっています。そこで、住友化学では殺虫効果のある蚊帳(オリセツ®ネット)を開発して、現地のNGOや地元のコミュニティグループを販売戦力として使い、オリセツ®ネットをより多くの人々に、特に貧困な人々にも届くように広げていくというビジネスモデルをケニアで検証していて、JICAはそれをサポートしています。住友化学では青年海外協力隊のOBも職員として働いていて、彼らの持っている現地とのネットワークやノウハウを使ってうまく事業ができないか検討を進めていると伺っています。

二つ目は、味の素の乳幼児の栄養改善の取り組みです。途上国では乳幼児の栄養不足が非常に大きな問題で、特に生後6カ月～2歳ぐらいの離乳期の栄養状態が悪いことがその後の健康に悪影響を及ぼすということで、大きな課題になっています。味の素では、もともと食、アミノ酸の知見・技術をお持ちなので、乳幼児の栄養改善に貢献できるサプリメント「KOKO Plus(ココプラス)」を開発しました。KOKOというのはトウモロコシのおかゆのことだそうです。子どもの離乳食にも使われているそうで、おかゆにKOKOプラスを加えると、栄養バランスが良くなって子どもの栄養状況が改善されるということで、味の素は現地生産を立ち上げてBOP層に製品を届けることを試みようとしています。JICAは、そのビジネスモデルを構築する支援をさせていただいています。味の素はこのワン・ワールド・フェスティバルにも出店されていて、ブースに実物が置いてあるのではないかと思いますので、是非ご覧ください。

(荒木) 味の素はこの建物の3階でブースを出されています。

(荒木) JICAの民間企業との連携について話していただきました。高橋先生、アカデミックの世界では、政府と民間企業、それぞれ役割が違うと思うのですが、どのような役割があるのか、簡単に説明していただけますか。

◆国際協力におけるそれぞれの役割

(高橋) 今日たくさん来ている学生の中には、私の仲間の大学の先生から「企業って悪いことをするからな」「ODAは企業の利益によってゆがめられている」と教わっている人も、何人かいるかもしれません。あえて言いますが、企業の役割は貧困削減に絶対に必要です。仕事がなければ、人々は長い間にわたって貧困をなくしていくことはできません。この点はゆるがせにできない、とても大事なことだと思います。

一方で、大事なことは、企業の基本はお金もうけですから、もうからないことをずっと企業にお願いしてやってもらうわけにはいかないということです。授業料を取らない小学校を企業がつくることはできません。安い診療費の診療所をつくることもできません。無料の道路やその他のインフラをただで造ることもできないので、そういうところには政府、そしてそれを支援するNGOの役割が必要になるということです。できることとできないことを企業、政府、NGOほか

互いに補い合っていくことが重要だと思います。幸いなことに、アフリカにもたくさんの民間企業が出掛けられるようになって、それとともにお金も持ち込んでいます。先ほどお見せしたナイロビの近代的な発展は、そうした変化のおかげなのです。

ただ、まだ企業に疑いがあるという学生さんはおられるかもしれませんので、さらに説明が必要なかもしれません。企業は企業で、人類社会の企業市民としての自覚を持って、責任感を持って活動しなければいけません。時々そういうことから外れるところがあるかもしれません。それを規制する力を持っているのはやはり各国の政府であり、国際社会です。残念ながらそういう取り組みが遅れていることも事実です。連携というのは、Win-Winとおっしゃいましたが、一方でお互いがお互いをきちんとコントロールし合うものでなければいけません。だからといって政府が常に正しいわけでもない。そういう健全なチェックのし合いが官民連携の中で必要になると思います。

(道端) 荒木さん、国際協力に関して外務省はどのような役割を果たしているのですか。

◆外務省の役割

(荒木) ありがたい質問を頂きました。JICAと外務省の関係は分かりづらいところがあると思うのですが、簡単に言うと一体でやっていますが、それぞれ役割が違います。外務省は役所としてJICAの予算や無償資金協力の予算を財務省と折衝して作成し、国会に諮って承認頂きます。その予算をJICAは技術協力や無償資金協力の使って、実際に援助を実施しています。つまり、私の家庭に近いのですが、お父さん(外務省)が一生懸命働いてお金を稼いで、お母さん(JICA)が援助に使うということかもしれません。うちの家庭と一緒に夫婦仲がいいので、お互いに話し合いながら、現場の状況はJICAからインプットを頂いて、こういうところに援助をしていこうという政策を外務省が考えて、相乗効果を活かしつつ実施しています。

特に大使館とJICAの海外事務所は、ODAタスクフォースという枠組みをつくっていて、その中で、今何をすべきかという援助の方針を国ごとにつくっています。援助を実施しているJICAと、途上国政府と交渉している外務本省や現地の大使館が協力し合いながら政策をつくり、予算をつくり、それを実際に実施しているのがJICAという感じです。また、外務省だけで大使館が実施している外交的観点の要素が強いODAの種類もあります。ODAは国民の税金を原資としているので、外交の重要な手段、として使わせていただいています。最近いろいろ変わってきてはいますが、日本はアメリカのように軍事面で世界に貢献することはできないので、平和国家としてODAで世界に貢献することが重要な外交のツールで、2国間関係の観点から開発途上国に支援したり、国際機関にお金を拠出することで日本の国際的責務を果たしています。そちらは外務省が積極的にやっています。

カレンさんは、活動としてユニセフに積極的にコミットされているということですが、どんなことをされていますか。

◆ユニセフの活動について

(道端) 私は6年ぐらいユニセフの活動に参加しています。私は子どもができるまで、ユニセフという名前は聞いたことがあっても、何の活動をしている団体かはあまりよく分かっていませんでした。きっとアフリカなどの貧困問題の援助をしているのだろう位の捉え方しかしていませんでしたが、あるとき東京にあるユニセフハウスに行って、ユニセフの活動を見たのです。そこで先ほどおっしゃっていたマラリアの蚊が入ってこない蚊帳を日本の企業が作っているという話や、難民になってお父さん、お母さんから離れた子どもたちには、心のケアがすごく大事なので、ぬいぐるみやサッカーボールを届けたりしているという話を聞いて、私も子どもがいるので、海外にたくさんいるそういう子どもたちに自分は何ができるかと思って、それをブログに書いたのです。そのブログをたまたまユニセフの広報の方が見てくださったことがきっかけで、アグネス・チャンさんが36年続けている募金活動に、私も6年前から参加するようになりました。いつもクリスマスの時期に、ユニセフサンタになってみんなで活動しています。

他にも、ルーム・トゥ・リードという女性の教育に目を向けた活動のお手伝いもさせてもらったことがあります。ルーム・トゥ・リードは、例えば、お母さんが字が読めないと、子どもが病気になったときに薬をきちんと使うことができないので、女性の教育が家庭を守るのに大事だと考えて、世界で活動している団体です。私は美容と絡ませて協力させていただき、皆さんに使わなくなった化粧品を集めてきてもらって、口紅やチークを子どもたちが絵を描くためのクレヨンとしてルーム・トゥ・リードに寄付しました。

さらに、TOMSというアメリカの靴のブランドが世界中にあるのですが、そちらにも少し関わっています。TOMSは、靴を1足買うと、途上国の靴のない子どもに靴が1足届くという取り組みをしています。私は実はアルゼンチン生まれなのですが、そのTOMSを作ったアメリカ人の男性は、アルゼンチンに旅行したときに、裸足で生活している多くの子どもたちと出会ったのです。彼らはそれで足をけがして、そこから病気になってしまうのです。彼は靴がないというのはすごく不便だ、では自分は靴を作る仕事をしようと考えてTOMSというブランドを立ち上げて、靴を1人が買ってくると1足届けに行くという取り組みを始めました。実際に靴を届けに行くパートナーを世界中で見つけて、足の成長とともに、何度も途上国の同じ場所に届けに行くのです。

TOMSの活動で面白いのが、「One Day Without Shoes」というイベントです。1日だけ裸足で歩いて、子どもたちが裸足で生活するとどんな感じなのかを知るというもので、私も4月29日に1時間ぐらいみんなと表参道を行進しました。裸足で歩くのはとても怖かったです。足の裏が切れるかと思いました。そのような状態で生活している方々が世の中にいるということ、こうい

う場でお話ししたり、周りの方に伝えたりすることが私にできることかと思い、今日は一緒に学ばせていただいています。

(荒木) カレンさんどうもありがとうございました。ユニセフの活動や、その他いろいろな活動について語っていただきました。それぞれ素晴らしい活動だと思います。どんどん続けていただいて、また皆さんにもカレンさんの活動を機会に国際協力について考えていただければと思います。井川さん、高橋先生、いろいろな国際協力活動があると思うのですが、今日のテーマが「国際協力のはじめ方」なので、会場の皆さんに参考になるようなことを教えていただければと思います。

◆国際協力のはじめ方

(井川) 1点目は、海外に行きたいと思われていて、関心を持たれた方にお勧めなのが、スタディツアーです。例えば先ほど線路で暮らす子どもたちの話をしましたが、ああいうところを安全に配慮した形で数日～1週間かけて訪れるツアーがあります。それは私たちの団体だけではなく、いろいろなNGOがやっています。そういうもので訪れてみるのが、一つできることかと思います。

2点目は、海外に行くところまではちょっとという方でしたら、例えば本日のようなイベントや事務所でのボランティア、寄付などがあると思います。

(高橋) 海外に行くのが怖い、お金が掛かるという方も、国際協力はできると思うのです。日本社会がどんどん国際化していて、途上国から日本に来て暮らしている方もたくさんいらっしゃいます。そういう方に話し掛けてみて、その国のことを理解するのが始まりだと思います。話してみると、驚くほど同じということを見つけられると思います。でも、やはり違うのです。同じなのは前提だけれど、違うことがあることを理解する。東京生まれで神戸育ちの私ですが、大阪に来ると本当にあったかいなと思います。早く大阪のおばちゃんとフランクに関西弁で話せるようになりたいなと思いつつ、何年もたってしまったのですが、大阪のおばちゃんにお節介されると、すごくあったかい気持ちになるのです。日本人の多くの方は、お節介をすると相手に迷惑ではないか、おこがましいのではないかというためらいを持たれると思います。でも、大阪のおばちゃんのような人々もおられる。途上国の相手の人々は日ごろ、援助は必要としていないけれども、温かい心の交流は誰もが必要としています。そして関わることによって異なる相手についての勉強を始めることができます。ですから、学生諸君はまずお節介な気持ちを持つことがとても大事だと思います。

一つ提案したいのは、特に若い方はバックパッカーなどで途上国に行かれることがあると思うのですが、車いすを持って行ってみたいかどうかということです。多くの航空会社は、車いすをた

だで運んでくれます。とても重いですが、超過料金を取ることはありません。うちの学生も、私に持っていけと言われてすごく苦労して持って行って、渡せなくて持って帰ってきたりしているのですが、渡して長い間有効に活用してくれる先を探すことも皆さんの勉強になると思います。一人でできることです。中古の車いすを提供してくださる団体が日本の中に存在します。どなたでもできることなので、ぜひ試してみられたらどうでしょう。

(荒木) ぜひ皆さんよろしくお願いします。

西野室長、JICAの方でいろいろなメニューがあると思うのですが、一般の方が参加できるようなものにはどのようなものがあるのか、簡単にご説明いただきたいと思います。

(西野) まず、ボランティア事業にはどなたでも参加できます。20～69歳が参加できるのですが、ちょっとこれはハードルが高いと思われる方も多いと思うので、もう少し気軽なメニューをご紹介しますと、まず国際協力レポーターは18～60歳の方であれば誰でも応募できます。

(荒木) 会場に、レポーターでいらっしゃった方がお1人いらっしゃいます。(会場から元レポーターが手を振る。)

(西野) そうですか、ありがとうございます。海外の現場を視察して、それを日本に帰ってきてからご自身の言葉で発信していただくということを期待しています。明日の3時から国際協力レポーターが参加するイベントが開かれるので、ぜひそちらもご覧いただければと思います。

また、中学生、高校生の方向けには、エッセイコンテストがあります。JICAが毎年実施していて、今年度で高校生の部は53回、中学生の部は19回を数える非常に歴史あるコンテストです。毎年7万人くらいの方に応募していただいています。優秀賞を受賞すると海外旅行に行けるという副賞もあるので、ぜひ中高生は参加していただければと思っています。

(荒木) うちの課に、そのエッセイコンテストで賞をもらって海外で研修して、外務省に入って活躍している人がいます。

(西野) そういうきっかけづくりにもなっていると自負しています。また、学校の先生向けにも、教師の海外研修という制度があります。先生方が行って見てこられたことを、生徒に伝えていただくということを期待しています。

「なんとかしなきゃ！プロジェクト」というものもあります。会場をご覧になった方は、もうブースにも足を運んで見ていただいたかもしれないのですが、JICAがNGOや国際機関とコラボして実施しているプロジェクトです。ウェブあるいはSNS等を通じて途上国の現状や国際協力の事業などを紹介して、まず皆さんに知ってもらおうという活動を進めています。芸能界やスポーツ界の方などもご協力くださって、去年は歌手の倉木麻衣さんもカンボジアに行って、その様子を発表してくださいました。現地のことを知ることが第一歩だと思いますので、ぜひウェブあるいはブースもご覧いただいて、身近なところから国際協力を始めていただけたらいいのではないかと考えています。

(荒木) ありがとうございます。実は、会場の皆さんのほぼ全員が国際協力に携わっているのです。ODAは皆さまが支払われている税金を原資にしているものだからです。政府の全体支出の中の0.6%がODAに使われています。その割合が下がってきてしまっているのですが、税金を1000円払うと6円がODAになります。2万円のものを買うと8%の消費税がかかるので、必ず約10円がODAの資金になっているということで、実は皆さんがそれぞれODAのサポーターなのです。ですから、ODAは小難しいと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、皆さん実は参加されているということです。

今日のこのイベントをきっかけに、どのような使い方をされているのか、どのように使ってほしいのか、そういうことを考えて、外務省やJICAのホームページから、ODAの活動を見ていただければと思います。具体的に国際協力に参加する方法は、カレンさんのような方法、NGOのような方法、JICAを通じた方法、高橋先生のおっしゃったような方法などいろいろあります。そういう方法を今すぐ考えはじめることが大事なのではないかと考えています。

それでは時間も過ぎてまいりましたので、皆さん最後に一言ずつお願いします。

◆最後に一言

(道端) 今日はありがとうございます。とても勉強になりました。私もまた今日からいろいろと発信していきたいと思っています。

(井川) 本日はありがとうございます。難しく考えず、とりあえず何か身近なことからやってみるのがいいと思います。今日はたくさんNGOが来ているので、ご飯を買うだけでなく、「どんな活動をしているのですか」と一言声を掛けるだけでいいと思いますし、名前を覚えてFacebookなどを見てもいいかと思っています。

また、ここを出て左手の建物の2階に、外務省のNGO相談員というコーナーがあります。そこでNGOへの就職やボランティアやスタディツアーなど、NGOに関するさまざまな質問を受け付けて

います。今日と明日、ずっと開いているので、少しでも関心を持っていただいた方はそちらに来ていただくのもありかと思います。

(高橋) 井川さんとほとんど言うことは同じですが、先ほど荒木さんからお話があったように、皆さん既にODAの資金の出し手になっているのです。それだけでもある程度途上国の役に立っているということでもあるのですが、一方で責任が生じているということでもあります。まずはホームページや新聞、テレビなどで、援助や途上国の開発に関わるがあったら、今まで読み飛ばしておられた方も、興味を持って読むことから始めていただければと思います。貧困な人々は、貧困の前で立ちすくんでいるだけではなく、彼ら自身が力を合わせて努力しようとしています。

そういうことを応援していくことが一番大事なことだと思います。一緒に考えたいと思うので、もし興味を持った方がいらっしゃったら、ぜひうちの大学院に来て勉強していただければと思います。今日はどうもありがとうございました。

(西野) 今日ここにこれだけたくさんの方が集まってくださったことに励まされています。私たちJICAの仕事は、日本の仕事、国民の皆さまの仕事で、国民の皆さまの理解と支援の上に成り立っています。昨年が国際協力60周年で、今年が青年海外協力隊50周年という節目の年です。これからも途上国の人たちに喜ばれて国民の皆さまにきちんと支持していただけるような事業を進めていきたいと考えています。同時に、何をどうやっているのか、成果がどうなのか、途上国の人たちがどう受け止めているのかといったことを分かりやすく皆さんにお伝えすることにも、さらに力を入れていかなければいけないし、それは私たちの義務だと思っています。今度もこうした機会を含めて、いろいろなところでいろいろな形できちんとお伝えしていきたいと思います。本日は本当にどうもありがとうございました。

(荒木) 以上をもちまして、トークセッションを終わらせていただきたいと思います。皆さん本当にありがとうございました。